鷗外の歴史小説

その詩と真実

蒲生芳郎

著者略歴
蒲生芳郎　がもう　よしろう　宮城学院女子大学教授
1928年　山形県に生れる
1954年　東北大学文学部卒業
著　書　『文学へのめざめ—読書指導の記録と展開』（評論社），『森鷗外—その冒険と挫折』（春秋社）他
現住所　仙台市荒巻二の坂20－9

鷗外の歴史小説　その詩と真実
昭和五十八年五月十五日　第一刷発行
著　者　蒲生芳郎
発行者　神田明
発行所　株式会社春秋社
東京都千代田区外神田二ノ一八ノ六
郵便番号一〇一
電話〇三（二五五）九六一一（代）
振替東京八－二四八六一
印刷所　港北出版印刷株式会社
製本所　寿製本株式会社
定　価　二八〇〇円
NDC 910
©1983

〈序説〉鑑賞上の争点をめぐって……三

I　事実と創作——興津弥五右衛門の遺書……一三

その〈事実〉志向　15

その〈虚構〉の仕組み　40

II　リアリズムと反リアリズム——阿部一族……五九

〈無気味さ〉という印象　61

〈思い出〉としての原風景　85

III　近代性と反近代性——護持院原の敵討……一〇三

宇平という青年　105

文吉という忠僕　132

Ⅳ　政治性と非政治性——大塩平八郎……一五三
〈事件〉の中の人間たち　155
「枯寂の空」という虚構　176
Ⅴ　特質と限界——堺事件……一九五
抽象と捨象の原理　197
〈情念〉の欠落　214
〈結び〉にかえて……二四一
「歴史離れ」の作品群と史伝への道
あとがき　261

装幀　安達　史人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鷗外の歴史小説

〈序説〉鑑賞上の争点をめぐって

一

鷗外の歴史小説にまつわる伝説――作者自身がそのもとを作ったところの、いわゆる〈歴史其儘〉伝説は、近年確実に崩れつつある。たとえば、一九六〇年代以降、鷗外の歴史小説研究を飛躍的に推し進めた尾形仂氏には、早く、「鷗外の歴史小説の史料として取りあげた実録類は、結局のところ、（中略）鷗外自身の課題検証のための素材、もしくはその課題を追求する自己の意図を隠蔽せんがための一種の隠れ蓑として以上の意味をもつものではなかった」、その意味で「鷗外の歴史小説を、『客観的な歴史の再現の中に美を見出すことを目的とした』、歴史小説の一方の極の一典型にあげることには、なお多分に問題がある」とする意見(1)があったし、近くは、藤本千鶴子氏が、より明快端的に、鷗外の〈小説〉を〈歴史〉から区別してみせた。『阿部一族』をめぐる一連の業績(2)の中で、氏は、一方で厳密な文献学的方法を駆使し（鷗外の用いた主史料『阿部茶事談』の校合）、他方で精緻な歴史学的方法を展開しながら（史実としての〈阿部一族事件〉の究明）、鷗外の『阿部一族』と、その主史料としての『阿部茶事談』と、さらにそれらの大もとにある歴史上の阿部一族誅伐事件とは、決

して単純に重ね合わせられるようなものではなく、三者三様に「それぞれ別な世界を持っている」ことを実証的に解明してみせた。赴くところ、氏の意見によれば、『阿部一族』は「歴史学的想像力ではなく、文学的想像力による所産」にほかならず、そこに描き出されるのは「歴史的真実」であるよりは、鷗外に固有の「文学的真実」にほかならないのであり、つまりは、鷗外もまた、芥川らのように、「歴史」を捨象して、「まぎれもなく鷗外という人間の刻印が押された」小説を書いたまでではなかったのかということになる。

藤本氏には、「鷗外の、封建道徳の扱い方が、個の問題にとどまることは、問題である」という、けだし、鷗外の歴史小説の本質をついてきわめて的確な批評もあるのだが、さしあたって、〈歴史〉に対する鷗外の〈小説〉の限界、その相対性を明確にした点だけでも、氏の功績は大きい。——歴史小説といえども〈小説〉であって〈歴史〉そのものではない。したがって、鷗外が、いかに主観的に〈史料の尊重〉を心がけ、「歴史其儘」を公言しようとも、ひっきょう、鷗外は鷗外の〈小説〉を書いたまでだと、そう言ってしまえば事はひどくそっけない話になってしまうのだが、長い間の伝説から、真実を洗い出す仕事とは、たいてい、こういう当り前のことを当り前のこととして確認するところに成り立つ。

〈歴史其儘〉の衣裳は衣裳として、基本的には鷗外も鷗外に固有のモチーフに促されて自分の小説を書いたまでだ。そうと話が決まれば、話はすっきりする。あるいは話が進めやすくなる。つまり、鷗外はいかなるモチーフに促されて、いかなる小説を書いたのかと、問題は、そういう小説論本来の出発点に据え直されるからだ。だからこのところ、鷗外の歴史小説をめぐって、モチーフ論、あるいは主題解釈論が花ざかりである。

しかし、そこから先がいささかこみいってくる。言ってみれば、そこに鷗外のいわゆる〈歴史其儘〉の〈歴史其儘〉たるゆえんがあるということにもなるわけで、鷗外は、たとえば芥川龍之介や菊池寛がそうしたようには、自分の書く小説のモチーフやテーマを露出させることはしないからだ。小説である以上、それなりのモチーフもテーマもあるにはあるにせよ、それは一見〈歴史其儘〉という衣裳をまとっている、その衣裳を透かして、あるいはそれを剝ぎとって、いかなる〈肉体〉を見てとるか、そこで意見が分かれる。

二

私の見るところ、一方の見解は尾形仂氏によって最もよく代表される。氏によれば、鷗外の歴史小説は一貫して「権力と個我」（たとえば『阿部一族』に典型的にあらわれる）、あるいは「権力と無名の民衆」（たとえば『堺事件』に見るように）の間の対立と葛藤という図式を中心に展開されている。そして、大事なことは、そういう図式は、深いところで、「明治天皇によって象徴された皇室の絶対権力と近代的理性的個我との矛盾の間にどう調和解決の道を見出してゆくかという、かれ自身の喫緊の課題」につながるものだということで、つまり、鷗外の歴史小説は、こういう「かれ自身の喫緊の課題」を根源的なモチーフとする「『歴史』への問いかけ」にほかならなかったのだ。しかも、そのためにこそ、鷗外は「どこまでも『史料の自然』に従って歴史的事実を追求し、史実を自己主張に奉仕せしめるのではなく、厳密に再現された強力な史実によって自己の課題を検証するという方法を採」りもしたのだという。

したがって、尾形氏の議論からは、おのずと、鷗外の苦しい立場、彼が耐えなければならなかった

ひそかな苦渋が浮かび上がってくる仕組みになっている。――半生を絶対主義国家の高級官僚として生きながら、一方でひとりの文学者でありつづけた鷗外、その鷗外における公と私、いわゆる鷗外における〈二つの顔〉あるいは〈二つの寝床〉伝説と、以上のような尾形氏の立論はよく符合する。つまり、鷗外は、一方で「明治天皇によって象徴された皇室の絶対権力」に対して忠誠を誓いながら、他方で「近代的理性的個我」の真実もけっして放棄しなかった。しかもその立場からする「『歴史』への問いかけ」――自己当面の矛盾にどう対処すべきかという「喫緊の課題」に促された「『歴史』への問いかけ」を通じて、時に「個人の生命は絶対権力の強大な壁の前に悲劇的な滅びの道を辿るよりない」ことを闡明し（たとえば『阿部一族』、また時には、「権力に裏切られながらも、昂然として自己の生を精一杯に生き抜こうとする無名の人々」へのひそかな共感を吐露してやまない（たとえば『堺事件』）のであるとすれば、鷗外は、自分の書く歴史小説の中にほかならぬ己が宿命そのものを凝視し、自分が耐えねばならぬものをひそかにそこに仮託していたのだということになりもしよう。

これは鷗外に対して好意的な見方（鷗外がそれを喜ぶかどうかは別として）である。その意味で魅力的な見方である。少なくとも世に鷗外びいきとされる人々にとって魅力的な見方である。いきおい、尾形説の周辺には、いわばその惑星群が形成される。たとえば、周到な鷗外研究家小泉浩一郎氏は、さすがに、「保守主義者鷗外、あるいは鷗外における明治的ナショナリズム」という、やや右寄りのシフトを固めた上ではあるにせよ、基本的には尾形説を継承しながら、それをより深める形で独自の鷗外の歴史小説論をうちたててみせたし(3)、また、鷗外の「歴史小説」から「史伝小説」までをくまなく展望した二冊の労作を完成した山崎一穎氏(4)は、一方で「歴史のダイナミックなメカニズムの排除」を指摘しながらも、たとえば、「鷗外の歴史小説『興津弥五右衛門の遺書』（大1・10）、『阿部一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

族』(大2・1)、『佐橋甚五郎』(大2・4)を収録した創作集『意地』(大2・6、粉山書店刊)は、明治から大正への転換期の歴史的状況を、戦国期から徳川幕藩体制のそれに重層させることによって成立している」、その意味で「『意地』は鷗外の憤怒を内包し、シニカルな目によって貫かれている」と書くとき、そのかぎりで氏の考えもまた、尾形氏によって提起された図式にかなうものがある。さらには、鷗外の幼年期の記憶にかかわる「津和野藩のキリシタン迫害の事実」を、「権力のこわさと虚偽に対する原体験」として措定し、鷗外の歴史小説に一貫する「抑制された権力批判」や、「冷徹な国家批判」、あるいは「権力と民衆の力学」などを読みとる山崎国紀氏(5)や、鷗外に主として、身につまされる「サラリーマンの哀歓」を自己投影しながら、営々として鷗外評伝五部作を書き継ぎ、その第四巻――歴史小説制作当時の鷗外を語る書物の題名に、まっこうから「権威への反抗」と銘打ってみせた吉野俊彦氏(6)のような、根っからの鷗外びいきも現われている。もちろん、各氏には各氏それぞれの立論があり、いちがいにそれらを一括りに括るわけにはいかないのだが、それにしても、体制の中枢部に身を寄せて生きながら体制に対する批判意識を決して失わなかった鷗外、権力に仕える官僚として半生を過ごしながら、しかも権力のむごさやごまかしやいじましさ、総じて権力の悪をいささかも見のがすことのなかった鷗外という点では、尾形氏から吉野氏まで、鷗外を現代ふうに美化する見方において選ぶところがない。そういう見方に立つかぎり、鷗外は一貫して〈近代的個我〉の立場の信奉者であり、〈民衆の味方〉ですらあったということになる。

はたしてそういうものであろうか。もしそうであったとすれば、鷗外は内に〈反〉権力的、あるいは権力〈批判〉的な意識を一貫していだきつづけながら、明治末年から大正初期にかけて、天皇制国家の奥の院に坐したところの山県有朋の側近として権力に身をすり寄せ、その山県のために私的な歌

会（常磐会）の席をとりしきったり、公的な文書（陸軍増師上奏文）の起草にあたったり、時勢の動向にかかわる献策めいた小説を書いたり（『かのやうに』）、また、その最晩年には、その山県をかついで「帝室保存の社会策」を画策するかのごときけはいをうかがわせる幾通かの書簡(7)を認ためたりさえもしたのであろうか。そうだとすれば、鷗外の生き方は、〈二つの寝床〉に身を横たえるというよりは、いささかアクロバットじみた、あるいは二重人格ふうの奇怪な相貌を呈してくる。

三

当然、それとは違う見方、もっと単純で明快な見方もある。たとえば、〈民衆〉との共感共苦、〈権力〉への抵抗を生涯の原理としてきた中野重治は、かつて、「鷗外にはぬくい心が欠けている。けだものが二匹くっついて温め合うような心が欠けている」と言ったことがある(8)。また、「言葉が適当でないかとも思う」がということわり書きを置きながら、鷗外を「日本の古い支配勢力のための一番高いイデオローグ」、「日本の人民および日本の文学の最もすぐれた敵として認めること」の必要を説いたことは、もっとよく知られている。もちろん、これらは直接当面の歴史小説の解釈や評価にかかわる発言ではないにせよ、事は鷗外の全体像を覆う。少なくとも中野重治の理解のしかたに従うかぎり、歴史小説だけがその例外ではあり得ない。

この中野重治の鷗外観をいわば作品論に具体化した形で、しかし中野の議論よりはいっそう露骨尖鋭な形で、鷗外を断罪してみせたのが、大岡昇平氏の『堺事件』論(9)であった。くわしくは後にも見ることになるが、『堺事件』は、鷗外の歴史小説の第六作、慶応四年二月、泉州堺港に突発した、土佐藩兵によるフランス水兵殺傷事件と、その事後処理にかかわる問題とを素材とした小説である。鷗

外は、この小説を、旧土佐藩士佐々木甲象著すところの、『泉州堺烈挙始末』をほとんど唯一の史料として書きあげたのだが、大岡氏は鷗外の小説をこの史料とつき合わせ、大小軽重とりまぜて二十四箇所に及ぶ作為的な変更を指摘し、それらをもって、鷗外の「犯罪的な切盛と捏造」と断定する。なぜ「犯罪的」なのか。――鷗外はそれらの「切盛と捏造」を通じて、一方でフランス兵の無法と卑怯、土佐兵の無私と勇気とをきわだたせ、他方でこの事件から朝廷を免罪し、その神聖化をはかり、しかもそこに「公平めかした擬似考証性によって、真実の外観を作り出し」、そうすることによって、「開国征夷」を新しい国是とする山県体制の軍備拡張政策を推進しやすいように、「輿論を誘導しよう」とたくらんだからだ。つまり、大岡氏の見るところ、少なくとも『堺事件』の作者としての鷗外は、「山県べったり」の、「体制イデオローグ」にほかならなかったのだ。

鷗外は、はたして真摯誠実な〈文学者〉として、〈権力と個我〉あるいは〈権力と民衆〉の対立葛藤を見すえていたのか、それとも、時の権力者に奉仕し、体制を内側から支えようとする〈体制イデオローグ〉であったのか。

鷗外は白か、黒か。

四

しかし、物事は、いつでも、白でなければ黒、黒でなければ白と決まったものではあるまい。鷗外の歴史小説に関する全く別な見方もあり得よう。たとえば、生前の鷗外に親炙し、その文業を敬慕してやまなかった永井荷風に、早く次のことばがある。

「先生の所謂その題材を過去に求められたるものを通読するに、其の過去は単純なる過去にあら

ず、却てよく現在を説きまた未来を暗示するものたるを知れり。明治四十五年の秋陸軍大将乃木希典屠腹の事ありて後幾も無くして興津弥五右衛門の遺書の一作発表せられたり。これ寛永の末細川侯の家臣興津が殉死の事を題材となせるもの、三箇月を経て阿部一族の作あり。同じく殉死の状況を説きて更に一層の精緻を加へたり。これに由つてこれを観れば山房の歴史小説は文芸と社会と過去と現在との二重の意義を有するものといふべきなり。然りと雖若しこれあるが為に、山房晩年の文学を以て直に事蹟を古に借り時事を諷刺するものとなすものあらば、われは其の見解の浅膚なるを憫まざるべからず。芸術の制作と之が鑑賞批評の法とは両ながら此の如き簡単なるものにあらず。山房晩年の文学の因つて来れる所以は純然たる温古懐旧の感激にあり。江戸時代の士風学芸の憧憬にあり。これ制作の興会にして、過去社会の討究とその描写とは山房文学の本領となすところなり。たま〳〵題材の如何によりて時事の諷刺となり批評となれるは制作に附随し来る余影に過ぎず。」(10)

荷風の言葉をもう少しかみくだいて言えば、鷗外の歴史小説は、たとえばその第一作『興津弥五右衛門の遺書』が乃木殉死と密接にかかわるように、過去を描いて「却てよく現在を説きまた未来を暗示する」ところ少なしとしない、その意味で、それらから時事的・現代的関心にかなう問題を描き出すことは、あながち見当違いではない。しかし、だからと言って、それらをもって「時事を諷刺するものとなすもの」(たとえば、『大塩平八郎』をもって、大逆事件によって触発された権力批判意識を諷喩するものとしたり、反対に『堺事件』に権力者の政策推進のための道ならしを図る政治的たくらみを見てとったりする読み方がそれにあたるだろう)は、憫むべき「浅膚」な見解と言うしかない。なぜならば、現代的関心にひきつけて右から見たり左からにらんだりするときに、よしんばそういう

読み方が成り立たないものでもないにせよ、そういう効果はしょせん「制作に附随し来る余影に過ぎず」、鷗外の「晩年の文学」（歴史小説から史伝まで――引用者注）の最深根本のモチーフは、「純然たる温古懐旧の感激」、「江戸時代の士風学芸（「士風」は主として歴史小説にかかわり、「学芸」は主に史伝にかかわるだろう――引用者注）の憧憬」に発するものにほかならないからだ、ということになる。

身をもって〈日本・近代〉のアンチテーゼを生きた荷風の批評的眼識、いっさいの〈近代的意匠〉の「浅膚さ」を見抜くその批判精神には定評がある。そう思って読み直せば、これもまた恐るべき文章ではないのか。なぜならば、昭和十一年、斎藤茂吉が「鷗外の歴史小説」なる一文(11)を発表するまで、かの『興津弥五右衛門の遺書』――乃木希典の霊前に捧げられた香華にもたぐうべき『興津弥五右衛門の遺書』についてすらも、「時事」とのかかわりを言う人がほとんどなかった（まったくなかったわけではないにせよ）時期において、すでにこの文章があるからだ。荷風は、五十年後の評壇の動向、鷗外の歴史小説をめぐる〈近代的〉あるいは〈現代的〉解釈（すべて現代ふうの問題意識に結びつけて解釈したがる傾向のことだ）の流行を予見していたのであろうか。――荷風の意見に従えば、鷗外の歴史小説に権力者の意を体した輿論操作のための衒学的陰謀を摘発する検事から、反対に、権力を告発もしかねまじき秘められたる本音をひきだしてみせる弁護士まで、現代流行の議論は、すべて、「芸術の制作と之が鑑賞批評の法と」を知らざる、「愚」むべき「浅膚なる」見解ということになりかねない。

はたして、尾形氏や大岡氏の見解が皮相浅薄なのか、それとも荷風の言こそが、世をすねた隠居のひが目によるものであったか。――以下の論考における私自身の問題意識は、主としてこの問題を基軸として立てられるはずである。

〔注〕

(1) 尾形仂氏『森鷗外の歴史小説――史料と方法』(筑摩書房、昭54・12)

(2) 藤本千鶴子氏の『阿部一族』をめぐる業績には、管見に入ったかぎりで次の七つがある。

(1)「校本『阿部茶事談』――底本・熊本県立図書館本『阿部茶事談』、校合本・東北大学狩野文庫本『阿部茶事談』、熊本県立図書館上妻文庫本『阿部茶事談事跡録』、荒木精之氏蔵本『阿部茶事談』、熊本大学依託細川家永青文庫本『阿部茶事談』」(真下三郎先生退官記念論文集刊行会編『近世・近代のことばと文学』第一学習社、昭47・12、所収)

(2)「鷗外『阿部一族の主資料』阿部茶事談の性格」(右と同じ)

(3)「歴史上の『阿部一族』事件――殉死事件の真相と鷗外の『阿部一族』」(『日本文学』昭48・2)

(4)「『阿部一族』殉死事件の真相と『阿部茶事談』の史料的性格」(熊本史学会『熊本史学』第四十四号、昭49・10)

(5)「鷗外『阿部一族』の発想――作品と実体験」(広島大学近代文学研究会『近代文学試論』第十四号、昭50・11)

(6)「『阿部一族』の発掘――阿部弥一右衛門の出自・経歴・殉死」(『文学』昭50・11)

(7)「阿部一族の反乱と鷗外の『阿部一族』」(『武庫川国文』第十四、十五号、昭54・3)

(3) 小泉浩一郎氏『森鷗外論　実証と批評』(明治書院、昭56・9)

(4) 山崎一穎氏『森鷗外・歴史小説研究』(桜楓社、昭56・10)、『森鷗外・史伝小説研究』(桜楓社、昭57・5)

(5) 山崎国紀氏『森鷗外――〈根〉に生きる』(講談社現代新書、昭52・12)

(6) 吉野俊彦氏『権威への反抗　森鷗外』(PHP研究所、昭54・8)

(7) 大正八年末から九年春にかけての賀古鶴所あて書簡をさす。

(8) 中野重治『鷗外　その側面』(筑摩書房、昭27・6)

(9) 大岡昇平氏「『興津事件』の構図――森鷗外における切盛と捏造」(『文学における虚と実』講談社、昭51・6、所収)

(10) 永井荷風「隠居のこゝと」(『荷風全集　第十五巻』岩波書店、昭38・11、所収)

(11) 斎藤茂吉「鷗外の歴史小説」(『文学』昭11・6、掲載)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com